

1907-31年における大連港を中心とする紙類の流通

宋 芳 芳

Abstract

Paper was the necessary in the life of the Manchurian inhabitants though it was not the principal article imported through Dalian Port.

This study is a research on analysis of the change in quantity and variety of Paper imported through Dalian Port (1907-31) to show the change of paper need in Manchuria and to reveal the commercial network between Dalian Port and its hinterland based on statistics of Chinese Maritime Customs and the South Manchuria Railway Company.

Firstly, the total value of Paper imported through Dalian port was superior over Newchwang Port (Yingkou port) from 1924. But Newchwang port remained superiority in Chinese Paper import and Dalian port was the main route of foreign Paper import.

Secondly, the value of imported Chinese Paper and foreign Paper increased every year, but the foreign Paper increased more and it exceeded Chinese Paper from 1926 according the total value in three ports of South Manchuria (Dalian port, Newchwang Port and Andong port). The consumption of Chinese Paper (eg. Joss or Lohai) and foreign Paper (eg. printing paper) showed the social change in Manchuria. The consumptions of Paper of cities along the South Manchurian railway were different because of cultural/economic/inhabitant member difference.

Finally, the commercial network in Paper between Dalian port and its hinterland was stronger than that in Cotton Piece Goods. Its hinterland not only included Yingkou, Fengtian(Shenyang), but also Harbin which belonged to the hinterland of Vladivostok port.

キーワード……大連港 南満州鉄道 中国紙 外国紙 焼紙 印刷用紙

はじめに

本稿では満洲事変までの大連港を中心とする紙類の流通を分析する。またそれと密接な関係にある「満洲」地域における紙類の需要の変転を検討する。

製紙は、中国古代の四つの発明のひとつとして、世界に知られている¹⁾。「満洲」地域では、

木材など製紙資源が豊富であったものの、1931年までは製紙業は未発達だったため、主に地域外から輸移入された。満洲族入関以前の「満洲」には、紙類は主に朝鮮からの朝貢と開市貿易で獲得されており、紙類についての厳しい統制が行われていた。満洲族入関以前の資料である『満文老档』は、明の遼東地方官衙の旧公文及び高麗紙が使われたという²⁾。

20世紀以前においては、牛荘が「満洲」地域における唯一の条約港であった。汽船による紙類の輸移入額についての海関統計がある。ただ1900年のロシアの牛荘港占領以前には、ジャンクによる移入額は常関統計がないので、実際に牛荘港に輸移入した紙類の総額が不明である。このような統計上の問題を踏まえつつ、1898年から1900年までの牛荘港の紙類の輸移入額を検討し、20世紀以前の「満洲」地域における紙類流通状況の一端を見よう。1898年の牛荘港紙類の輸移入総額は204,545両であった。1899年は、1898年1.6倍に増加し、317,203両に上った。1900年には義和団運動の影響を受け、1898年の半分以下に減少し、それぞれ120,897両に激減した。そのうちの中国紙の割合を見ると、86.2%、76.1%、93.1%を占めていた。このような中国紙の移入の優勢は、「満洲」地域の中国紙に対する消費需要構造を反映したものである。中国紙の多くは焼紙である。焼紙純移入額の割合を見ると、1898年、1899年の二年は、一割を占めた。1900年には、ジャンクの貿易額も加わって、焼紙の割合は、23%に上った³⁾。

1907年の大連港における大連海関の設置、安東港での安東海関の設置によって、「南満洲」には牛荘、大連、安東の三つの開放港が揃った。紙類の輸移入も、かつては牛荘港が唯一のルートだったが、多元化的な流通ルートに転換した。中国紙を中心とする牛荘港と、外国紙を中心とする大連港という流通構造が形成された。

背後地における紙類に対する需要構造の変化に伴い、1920年代の半ばから、大連港の「満洲」における主なる紙類輸移入の港としての位置が確立された。

一 大連港における紙類の輸移入

以下において、まず1907年大連海関設置以前の大連港紙類輸移入状況を見よう。次に、海関史料を利用し、1907年から1931年までの大連港を中心に、大連港の貿易構造における紙類の位置、大連港の中国紙・外国紙輸移入構造、大連港の紙類輸移入の仕入地別及び大連港輸移入の紙種別ごとの推移を検討する。その上で「南満洲」三港の総体的な状況のなかで大連港を位置づけつつ、その構造を実証的に検討しよう。

1 大連港貿易構造における紙類の位置

紙類は、大連港輸移入品のなかでの割合は低いものの、「満洲」に暮らす住民にとっては欠くことのできない必需品であった。紙類の輸移入についての資料は、1898年のロシアの大連港開

放から1907年の大連海関設置までについては、断片的なものしかない。1902年には、輸入総額の4,816,126留のうち、紙類の輸移入額はわずか1303留であった⁴⁾。1913年には、704,296海関両で、輸移入総額の1.9%を占めていた。1931年まで、最高の輸移入額は1930年の4,967,636海関両(2.7%)で、大連港輸移入総量に占める割合は、最高が1915年と1931年の2.9%である。各年の輸移入額をみると、大体増加する趨勢を示したことがわかる⁵⁾。

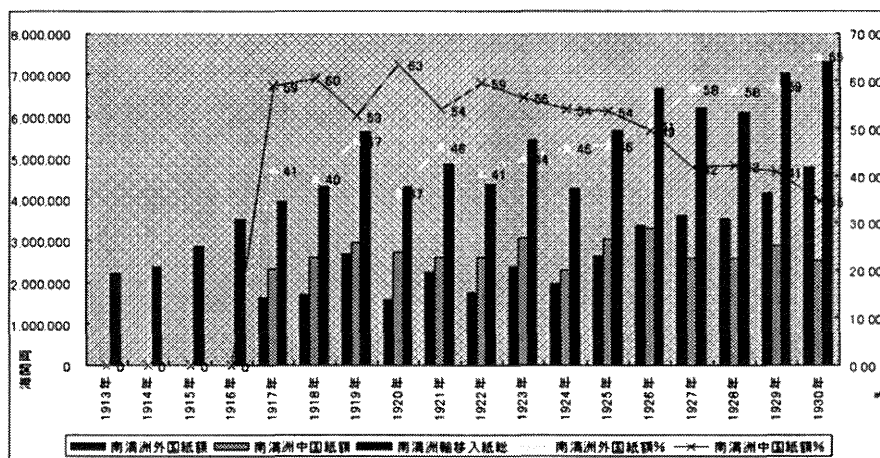
2 大連港における中国紙と外国紙の割合

(1) 「南満洲」三港における中国紙と外国紙の割合

「南満洲」三港輸移入の紙類の総額をみると、1913年の2,217,080海関両から、1930年の7,304,061海関両へ、三倍に増えたことがわかる⁶⁾。

そのうち、図1で示したように、中国紙移入は、1925年までは外国紙より多かったが、1926年から外国紙の輸移入額の方が、中国紙を超えた。

図1 「南満洲」三港における輸移入紙類外国紙と中国紙額及び割合(単位:海関両)



出典:『北支那貿易年報』(南満洲鉄道株式会社総務部調査課(大正六年-昭和五年上編)南満洲鉄道株式会社、1919-1931年)各年度より整理作成。

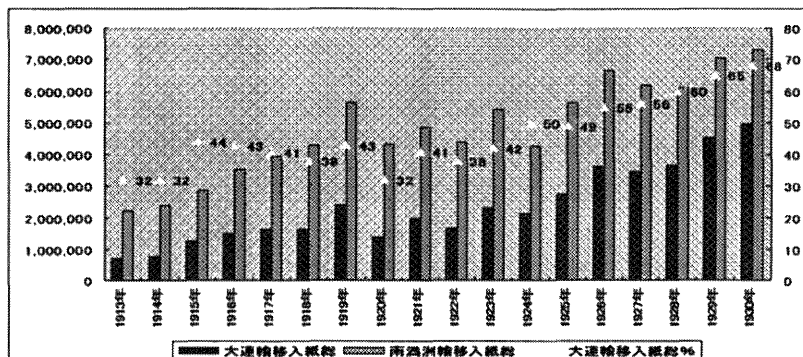
注 外国紙と中国紙の輸移入額が1917-1930年。

また、1917年を基準とすれば、1930年に外国紙は2.93倍に増加し、中国紙は1.09倍になったことが分かる。中国紙類の移入額が一定の規模を保っていたのは、大連港の背後地において中国紙の伝統的な消費習慣が強く維持されていたことを反映している。一方、外国紙の増加は、新聞などを代表とするメディアなど近代的な生活スタイルへの変容の結果でもあった。

1907-31年における大連港を中心とする紙類の流通(宋)

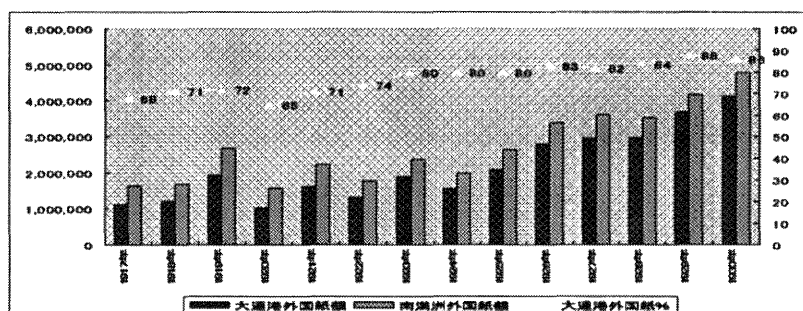
(2) 「南満洲」三港輸移入の中国紙と外国紙をめぐる大連港の位置

図2 大連港輸移入紙類及び「南満洲」三港における割合 (単位 海関両)



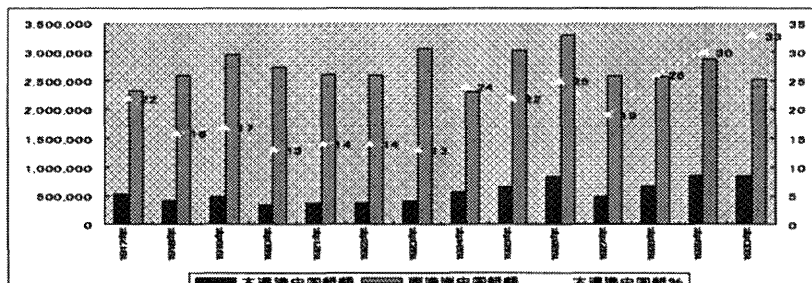
出典：図1に同じ。

図3 大連港輸移入外国紙及び「南満洲」三港における割合 (単位 海関両)



出典：図1に同じ。

図4 大連港輸移入中国紙及び「南満洲」三港における割合 (単位 海関両)



出典：図1に同じ。

図2で示したように、紙類の輸移入における大連港の優勢が1924年を境として確立した。1924年以前は、大連港の南満洲三港における輸移入紙類の割合は三、四割であったが、1924年以降は大体五割以上を占めることになった。

中国紙と外国紙を図3により比較すると、大連港が「南満洲」三港のなかで主要な外国紙輸移入港であったことがわかる。1917-22年の間には、六、七割を占めた。1923年以降は、八割以上を占めた。

中国紙の場合は、牛莊港が優勢であったが、大連港がその割合を徐々に増加させた。図4を見ると、1918-23年には一割ぐらいであったが、1924年には二割となり、さらに1929年、1930年には三割になった。

(3) 大連港の紙類輸移入仕入地別の比較

第一次世界大戦以前は、「満洲」における外国紙は主にドイツ製紙であった。第一次世界大戦期にドイツ製紙は減少し、代わって日本製紙類の割合が増加した。大連港輸移入紙類の主要仕入地は、日本となった。1917年-1930年の平均の割合は73.1%であった。そのうち、1922年には、92.3%を占めていた⁷⁾。

(4) 紙の種類の変遷

① 中国紙の種類

中国紙の種類は、海関の分類によると、早期には、一等、二等、焼紙であり、後期には、上等品、中等品、下等品、焼紙、其他、廠製紙(機械製紙)、藁板紙、壁紙などであった。一等紙は紙質が白く書画用のもので、二等紙はそれ以外の粗紙であった⁸⁾。連史紙、宣紙を一等紙、毛辺紙、皮紙などを二等として扱っていた⁹⁾。

表1で示したように、「南満洲」三港移入の中国紙の種類は、中等、下等品が主であった。また、焼紙は中国紙移入額の一割を占めた。これは、「満洲」における中国紙の消費が、中下等紙と焼紙を中心としていたからである。「満洲」地域では文化用紙より、生活用紙の方を主としていたことが特徴である。

上等紙の割合は少ないが、年々その割合は増加の趨勢を示した。1915年には12.2%であったが、1929年には22.5%に増加した。これは、文化用紙の増加の趨勢を反映したものである。

大連港に輸移入された中国紙の種類は、「南満洲」三港全体の趨勢と同じである。

1907-31 年における大連港を中心とする紙類の流通(宋)

表 1 中国紙移入種別の割合(%)

	「南満洲」三港中国紙移入種別の割合				大連港の中国紙輸入種別の割合			
	1915年	1920年	1925年	1930年	1915年	1920年	1925年	1930年
上用品	12.2	16.7	19.6	14.1	20.0	0.3	25.9	9.5
中用品	15.6	22.1	26.3	26.2	77.2	1.3	45.6	29.3
下用品	0.0	4.0	16.4	39.2	0.0	0.0	20.9	47.4
炭紙	6.6	9.3	10.9	10.6	1.4	0.2	3.5	8.4
其他	32.8	35.5	26.9	7.5	0.7	0.0	4.1	4.6

出典：1915年、1920年、1925年のデータは、『満洲に於ける紙の需給と製紙工業』（満鉄調査資料 第111編、南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編、1929年）、1930年のデータは『満洲貿易詳細統計』（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、1931年）、南満洲中国紙総額『北支那貿易統計』（大正六年－昭和五年上編）（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、1919－1931年）より整理作成。

注1：『満洲貿易詳細統計』により中国紙種別による合計数と、『北支那貿易統計』に記載された年度中国紙輸入総額は、不一致である。割合の算法は、1915年上等紙を例とすれば、1915年南満三港上等品合計額/南満洲輸入中国紙総額×100。以下、外国紙の算法も同じである。

注2：1915年度南満洲輸入中国紙総額が不明で、各種類紙の合計によるものである。以下、同じである。

表 2 大連港における外国紙輸入種類の割合 (%)

	「南満洲」三港における大連港の割合					大連港外国紙総額における種類の割合				
	1915	1920	1925	1930	平均	1915	1920	1925	1930	平均
巻煙草用紙		100.0	83.3	95.9	69.8	0.0	15.0	9.2	9.7	8.5
普通印刷紙	100.0	79.2	78.2	91.1	87.1	24.4	18.7	24.7	29.2	24.3
油光紙		100.0	95.5	90.9	71.6	0.0	5.7	10.1	2.8	4.7
包装用紙、褐色又は色付	80.8	88.7	65.6	89.0	81.0	4.5	2.2	2.9	3.7	3.3
印刷用紙*		100.0	98.7	98.8	74.4	0.0	9.9	21.8	17.7	12.4
裏板紙	100.0	100.0	91.7	93.6	96.3	2.5	2.9	6.8	3.5	3.9
図面用紙、アート新紙、銀行券紙、羊皮紙等	100.0	100.0	50.9	25.4	69.1	1.2	3.7	4.4	3.1	3.1
筆記用紙			0.0	99.2	24.8	0.0	0.0	0.0	2.5	0.6
製函用板紙			0.0	97.8	24.5	0.0	0.0	0.0	5.9	1.5
日本紙	100.0	100.0		99.4	74.9	13.4	19.4	6.2	4.4	10.9
化粧紙	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	7.3	11.4	5.2	5.7	7.4
模造紙				94.5	23.6	0.0	0.0	0	11.9	3.0
壁紙	100.0	100.0	66.3	82.5	87.2	0.7	1.4	0.2	0.3	0.7

出典：表1に同じ。

注：* メカニカル・ウッド・パルプを用いていないもの。

② 外国紙の種類

大連港では外国紙の輸入が優勢であった。1915年、1920年、1925年、1930年の四年のデータをとり上げ、種類別に検討しよう。表2で示したように、特に板紙、巻煙草用紙、印刷用紙（普通とメカニカル・ウツド・パルプを用いていないもの二種類）、藁板紙、日本紙、化粧紙などは、ほとんどすべて大連港から輸入されたことがわかる。

大連港に輸移入された外国紙の種類別にみると、主に印刷紙、板紙、巻煙草用紙、日本紙、化粧紙、藁板紙、油光紙であった。一番多かったのは、普通印刷紙であり、平均で三割を占めていた。メカニカル・ウツド・パルプを用いていない印刷紙を合わせると、四割ぐらいを占めていた。

二 消費紙類の中国紙から外国紙への転換

「南満洲」三港の輸移入額を見ると、1926年までは中国紙の移入額が優勢であり、それ以降は外国紙の輸入額が優勢であった。中国紙では、焼紙、中等、下等品などの生活用紙が主であった。外国紙の使用目的は、印刷紙が代表的であった。消費紙類の転換は、生活スタイルの変容を反映したものである。ここでは、紙類消費額の推移と構造の変化を、紙類の用途に沿って、詳しく検討しよう。

1 焼紙(Lohai)

1910年代前期まで、「満洲」における中国紙の移入額は年額約1500万両で、その四割は焼紙であった¹⁰⁾。1920年代には「南満洲」三港における焼紙の移入が中国紙の一割を占めた。これを紙類総体に占める割合からみると、19世紀末から20世紀初期の牛莊港時代には、一、二割を占めていたが、1910年代以降は一割以下に減った。1923年の6%をピークとして、以後は減少し、1930年には3.7%になった¹¹⁾。

焼紙の移入額が一定量を維持したことは、「満洲」における伝統的な社会風習が容易に変わらなかったことを反映したものである。一方、紙類総輸移入量における割合の減少は、新たな近代的な紙類消費が浸透しつつあったことを反映したものである。

焼紙は生活用紙として「官吏紳商農民何れも均しく使用」¹²⁾していた。「満洲」における漢族民間社会は毎年陰暦正月十五日と祖先の忌日に必ず焼紙を燃やした。又老人が亡くなった時や親戚故友を弔祭する時に必ず焼紙を購入した。焼紙の多寡により貧富が区別された。

漢族の葬儀で使われた紙の風俗は、以下の通りである。

一般的な例として、人が亡くなった後、遺族は直ちに紙製の轎を門外で焼き、又門扉には白紙製の紙銭を掛け、別に「制」の一字、或は「不領帖」の三字を白紙に書いて貼り、其忌中のことを知らせる習慣があった。死後三日まで守制の儀式か済むと、その夜には紙製の車馬や、

1907-31年における大連港を中心とする紙類の流通(宋)

冥器等を街道に送り出し、焼き棄てる「途三」という風俗があった¹³⁾。三日目に出棺し、墓地に行く途中に寺廟、井戸、若しくは辻等があれば、紙銭、紙樓などを焼いた。これは魔鬼を払う為と称されたが、死者の穢れを他に及ばさない意味もあった¹⁴⁾。墓の前に紙銭を焼き、三十五日目には紙傘を焼き、六十日目には、紙船及紙橋を焼き、百日目には封筒の表面に子孫の名を記載し、その中に銀錠及紙銭を入れ、屋外でそれを焼き捨てた¹⁵⁾。

清明節と中元節及十月一日の下元節には年々墓参り例があったが、清明節は墓に参り、圓丘に土を添え、紙銭を焼く風俗があった。中元、下元の二節には、お墓で紙製の衣服を焼いた。漢族はこれを送寒衣(ソンハンイー)と称した。死者に冬衣を送るという意味があった¹⁶⁾。

中国紙は、これらの習俗を行う上で欠かすことの出来ないものであった。

2 壁用紙

「満洲」における中国人の生活のなかでよく使われた紙類の用途として、壁や天井に張った建築用の紙がある。中国紙の窩紙や、古新聞紙、外国紙の壁紙などがよく壁用紙として使われた。

日本牛莊領事館の1902年の報告によると、20世紀初期の牛莊における家屋の構造は、土蔵的な建物で、天井は高粱の幹を組み立て造られ、天井及壁は所謂窩紙のようなもので表糊した。従って年々その消費が増え、供給が足りなくなることがたびたびあったという¹⁷⁾。

1920年代の「満洲」における中国人の家の建築においては、古い家屋の室内の壁には下塗り藁漆喰を用い、上は馬糞紙様の中国紙と石灰を混入し、石灰の汁を使って胡粉塗りを加えた。そして、多くは紋様のある壁紙を張り、あるいは古新聞を張った。各室には南東のいずれかの方面に窓があって、二枚の障子があった。上流層は窓に硝子をはめ込んでいた。普通に窓に使われた紙には油紙や白紙など朝鮮紙に似た厚い丈夫なものである¹⁸⁾。

ロシアの牛莊占領期には窩紙について、以下のようなエピソードがあった。1901年には、ロシア民政庁は牛莊港及び附近の村里に布告し、清潔法を実行した。その一段階としては、各戸に壁及び天井の壁紙を張り替えさせ、また天井のない家には新たに天井を設けさせたので、壁紙の需要がにわかに増加し、各紙舗の供給に不足をきたしたという。金融為替相場の暴騰に加えて、窩紙、甲紙の価額がますます騰貴し、四割一分増加したという¹⁹⁾。

外国紙の壁紙も輸入されたが、紙類輸移入総額の0.1%—0.3%の間であり、輸移入総額は変動が激しかった。

3 包装用紙

包装用に使われた紙は中国紙で、甲紙、草紙、毛辺紙、毛頭紙などがあり、又古新聞紙も包

装用としてよく使われた。

「満洲」における包装用の紙として、最初は、甲紙、草紙などの中国紙が使われたが、古新聞紙の輸移入とともに1907年頃から前者の需要が減少し、後者の需要が高くなった。

呉服類等の包装としては中国紙の毛辺紙、毛頭紙等の下等品が多く使われた²⁰⁾。

4 印刷用紙

外国紙の大宗である印刷用紙に対する需要の増加は、大連港の背後地における近代的な文化事業の発達を反映したものである。その輸入は、ほとんど大連港経由であった。

印刷用紙の用途の一つは、新聞用紙である。近代「満洲」における新聞の発達は、この印刷用紙の消費高を反映したものであろう。「満洲」における新聞の状況は、創立と廃止があいついだのでとても把握しにくい。李相哲は『満洲における日本人経営新聞の歴史』²¹⁾で、満洲における日本語新聞(日刊紙)を整理したが、それから漏れた日本語新聞紙もある。また、中国人やロシア人、欧米人経営の新聞については触れていない。「満洲」における新聞の全体像はまだ不明である。不完全ではあるが、筆者の作成した統計によると、1900-31年までの「満洲」における新聞・雑誌・通信は、349種にのぼった²²⁾。

中東鉄道のロシア語機関紙「哈爾濱日報」(ハルビンスキーウエーストニク)は、筆者の見る限りにおいて「満洲」における最も早く刊行された新聞である。二番目の新聞は、大連で1905年10月15日に創刊された日本語新聞「遼東新報」である。これは、1905年5月5日に大連居住の末永純一郎が大連遼東守備軍司令部より発行の特許を受け、発行したものである²³⁾。その後「満洲」各地に新聞・雑誌が相次いで刊行された。言語はロシア語と日本語のほか、中国語、英語、朝鮮語、蒙古語が用いられた。

1931年までの発行部数5000部を超える新聞についてみると、大連で発行された日本語新聞「満洲日報」、「大連新聞」、中国語新聞「泰東日報」、「満洲報」、ハルビンで発行されたロシア語新聞「ルーボル」、「モルワ」、「エホ」、「グンバオ」、「コムメルチエスカヤ・ボチタ」、「ハルビンスコエ・ヴレーミヤ」、ロシア語と英語の「ゲロリド・ハルビナ」、中国語新聞「大北新報」「国際協報(The International)」、奉天で発行された日本語新聞「奉天毎日新聞」、「奉天新聞」、中国語新聞「盛京時報」、「醒時報」、「東報」、「東三省民報」、「奉天市報」、「新民晩報」などが挙げられる。そのなかで発行部数が一番多いのは「満洲日報」²⁴⁾である。1931年末には、九万部を超えた。中国語新聞で発行部数が一番多かったのは大連で発行された「満洲報」であり、1931年末の発行部数は六万部であった。中国人経営の新聞のなかでは、「新民晩報」の発行部数が一番多く、1930年末の調査によると、四万七千部であった²⁵⁾。

このような新聞の勃興は、「満洲」地域における民衆文化の向上と近代文化事業の発達を反映したものであった。

表3 「満洲」における新聞の統計(都市別)

	1908年末	1919年末	1921年末	1923年末	1924年末	1925年末
大連	4	4	9	9	5	9
牛莊	2	2	2	3	3	3
安東	3	1	1	3	3	2
熱河			1			
赤峰					1	1
遼陽	1	1	1	1	1	2
奉天	4	12	8	9	9	8
撫順			1	1	1	1
本溪湖				1	1	1
鉄嶺	2	3	2	3	2	2
開原			1	2		2
四平街			1	1	1	1
鄭家屯		1				
公主嶺					1	1
長春	1	7	8	5	1	7
吉林	3	8	6	5		6
龍井村		2	2	2	2	2
局子街					1	1
ハルビン	4	13	23	20	18	21
齊齊哈爾		3	3	2	2	3
黒河		2	2	1	1	1
満洲里		4	2	1	1	1
合計	24	63	73	69	54	75

出典：1908年末時点の資料は、「附録香港」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B02130818300(55頁-56頁)調書・情報局・清国ニ於ケル新聞紙ニ関スル調査/明治42年1月印刷(外務省外交史料館)。

1919年末時点の資料は、「支那各地新聞要覧」JACAR:B02130798800(第539-540画像目画面、99-101頁)調書・情報局・支那(附極東西比利亚)ニ於ケル新聞及通信ニ関スル調査/大正9年9月印刷 大正8年末調査(外務省外交史料館)

1921年末時点の資料は、「支那(附香港、西伯利)ニ於ケル新聞紙統計表」JACAR:B02130799900(151-153頁)調書・情報局・支那(附香港西伯利)ニ於ケル新聞通信ニ関スル調査/大正11年6月印刷(外務省外交史料館)

1923年末時点の資料は、「支那各地新聞要覧」JACAR:B02130800800(第236画像目、281頁)調

書・情報局・支那（附香港）ニ於ケル新聞及通信ニ関スル調査／大正13年5月印刷 大正12年末現在（外務省外交史料館）
 1924年末時点の資料は、「支那（附香港）ニ於ケル新聞通信統計表」JACAR：B02130807600（第325-327画像目、169-172頁）調書・情報局・支那（附香港）ニ於ケル新聞及通信ニ関スル調査／大正14年7月印刷 大正13年末現在（外務省外交史料館）
 1925年末時点の資料は、「支那（附香港）ニ於ケル新聞通信統計表」JACAR：B02130815700（第423-425画像目、185-189頁）調書・情報局・支那（附香港）ニ於ケル新聞及通信ニ関スル調査／大正15年7月印刷 大正14年末現在（外務省外交史料館）。

三 地域別紙類消費とその特徴

1 紙類の取引

中国紙と外国紙の輸移入の構造的な変化に伴い、紙類取引の中心地は營口から大連に変わった。

(1) 營口

「満洲」の最初の開港場として、牛莊港（營口）を中心とした中国人商人の商業ネットワークが築かれた。紙類の取引も營口特有の金融制度である過炉銀を使って行われた。1910年代には營口から輸移入された紙類の販路として、東は大孤山、大東溝、西は錦州、山海関に達したという。²⁶⁾

營口から紙類の仕入を行うのは、多くは奉天、長春、吉林などの商人であった。あるいは、奥地に産品を運送し帰りに仕入れる商人であった。奥地から直接仕入れる商人は少なかった。²⁷⁾

鉄道開通以前は、遼河が牛莊港と背後地を結ぶ主要な交通ルートであった。遼河沿岸の遼陽、通江子、法庫門、奉天、鉄嶺などへの発送は、直接に船便で行われたが、沿岸ではない長春、吉林などへの発送は、馬車を使った。馬車は大抵六七頭ひきであった。冬には道路が凍ったから馬車を使いやすかった。一貨車4000余斤を満載出来た。夏には道路が泥濘化し、歩きにくかったので、わずか1500余斤でも積載出来なかった。その日数も、夏は冬に比べ三分の一ほど多くを必要とした²⁸⁾。

紙類の取扱いには季節毎の周期的特徴があった。春秋の二季に取引額が多かった。前期は開河（三月末）より五月、後期は閉河前（十一月）より一月であった。その原因は、主として消費習慣によるものが大きかった。生活用紙として、陰曆十月頃需要期に入り、年末に近づくにつれて、需要量が増加した。陰曆正月に至り需要が減少した。四月に入り紙類の需要が少なくなり、五月五日、八月十五日等祖先を祭る時期には焼紙など弔祭用紙の需要が多くなった²⁹⁾。

(2) 大連

外国紙を中心とする大連港では、外国紙の取扱は、主に大連の日本商人により行われた。1920

年代には、外国紙輸入が紙類輸入全体のなかで中心となった。大連商業ネットワークは紙類流通の主導権を握った。大連背後地との間の流通ルートを見ると、日本製品の場合は、大連における総売捌元である問屋から、全「満洲」の大きな紙屋へ直接流通させていた。ほかの紙屋に対してはさらに第二、三流の紙屋の手を経て間接に供給された。第二流どころの紙屋が直接日本に注文することは皆無ではないものの、その額は少なかった。日本では製造されていない特殊紙あるいは生産しているが為替その他の関係で外国品を有利とする場合は、日本内地の主として大阪における紙商またはハルビンの英独商から直接輸入した。

1920 年代に大連における一流の紙商は、富士製紙販売店の山田洋紙店大連出張所、樺太製紙一手販売店の大同洋紙店大連出張所、日本各社の製品及び外国品の販売店の荻原商店大連出張所であった。「満洲」に輸入された外国紙のほとんど 80%は以上の三店の輸入によるものであった。このほかに、北越製紙の丸大、王子製紙の中井、日本製紙の丸一、各社製品を取扱う大一があり、年数回出張員を派して輸入をしていた。取引量の 70-80%は中国人であるが、「満洲」における大小日中の各紙商は、すべてこれ等の諸店から配給を受けた³⁰⁾。

1930 年代には日本国内製紙業の合併が行われた。王子・富士・樺太の三社が 1932 年秋に合併した。その影響を受けて、1936 年 11 月に大連における富士・大同・中井の三店も合併し、日本洋紙株式会社が設立されて、外国紙の供給が一元化された³¹⁾。

2 紙類の地域別消費量

1903 年の中露合弁鉄道東清鉄道南満洲支線の開通までの間、牛莊港や大連港などの港湾から輸移入された紙類は、主に河と馬車などによって背後地に輸送された。

鉄道の開通により、鉄道が港と背後地を繋ぐ主要な交通手段となった。鉄道の貨物統計から、港と背後地の関係を検討できる。以下主に南満洲鉄道会社の統計を利用し、その実態を解明しよう。

1914-31 年の大連発各主要駅着の紙類の割合は表 4 の通りである。

その割合によると、大連発紙類の主要着駅は長春・奉天・中東線・営口である。首位は以下の通りである。1915 年—1919 年及び 1929 年—1931 年の間は、長春が首位であった。1914 年、1921 年—1928 年は奉天が首位であった。1916 年及び 1920 年は中東線が第一であった。これらの変動は、各駅を中心とする商業範囲の紙類の消費変動を反映したものであった。

1914 から 1931 年までの 18 年の貨物別の大連発営口駅着平均割合は、紙類が 10%で、綿織物が 24%である³²⁾。著しい特徴として営口駅着紙類の割合は綿織物の場合より少ないことがわかる。これは、紙類に関する大連日本人商人の商業ネットワークが綿織物と比べて強いことを示していた。特に 1926 年以降になると大連港の紙類輸入が主導権を握った。大連発営口着の割合も一割以下となった。紙類販売において営口商業ネットワークの衰退趨勢がはっきりした。

表4 大連発各主要駅着紙類割合と合計噸数(単位:(米)噸)

	奉天以南到着				奉天以北到着					合計 (米噸)
	關東州	營口	奉天	計	鉄嶺	開原	長春	中東線	計	
1914年	12.6	12.9	24.2	56.2	4.6	1.7	14.5	19.2	42.6	4,523
1916年	11.6	16.2	13.9	50.3	3	2.8	17	21.5	49.4	6,276
1918年	14.2	18.6	18.3	57.5	3.9	1.1	30	4.3	41.6	6,506
1920年	18.3	8.7	27.7	65.9	1.4	4.1	15.8	33.3	0	4,633
1922年	4.5	9	29.4	48.1	2	5.2	21	13.4	4.8	15,626
1924年	3.7	11.2	26.8	47.2	1.6	6.7	19.5	15.2	51.5	21,560
1926年	4.8	6.3	30.7	47.8	1.3	4.6	17.2	18.6	51	24,186
1928年	5	7.5	32.9	54.2	1	3.3	17.6	12.3	45	26,639
1930年	*	5.5	30.4	48.9	0.8	1.9	31.3	7.6	49.9	24,096

出典:「海港及奉天、長春各駅発著重要貨物噸数(大連発著ノ分)」1914-31年度(南満州鉄道株式会社編:『統計年報』(明治四十年一昭和六年)復刻版、竜溪書舎、1991年)より整理、作成。なお『統計年報』の1914-29年の単位は、米噸である。1930年、1931年の単位は噸であるが、全部米噸に統一した。

表5 紙類の各駅総着数における大連発各主要駅着数の割合(%)

	營口	奉天	鉄嶺	開原	長春	中東線	安東及沙河鎮	合計
1914年	91.4	83.5	35.7	7.8	14.9	49.7	0.0	33.1
1916年	94.1	53.2	37.1	16.3	20.0	49.8	4.5	37.5
1918年	85.4	43.3	33.7	4.5	23.3	30.0	4.9	28.7
1920年	81.3	51.0	*	12.5	13.7	22.5	4.6	26.3
1922年	94.7	81.8	43.9	34.5	41.0	44.8	49.4	49.0
1924年	97.7	84.5	49.1	56.1	55.9	48.5	43.5	58.5
1926年	90.7	83.6	48.8	43.7	52.0	51.1	36.2	57.4
1928年	69.1	77.7	39.6	52.6	48.9	49.6	24.2	52.0
1930年	82.4	84.5	44.2	53	67.2	65.7	62.9	54.5

出典:「重要貨物発著噸数」、「各駅重要貨物到着噸数」、「海港及奉天、長春各駅発著重要貨物噸数(大連発著ノ分)」各年度(南満州鉄道株式会社編:『統計年報』(明治四十年一昭和六年)復刻版、竜溪書舎1991年)より整理、作成。なお、「*」の鉄嶺の場合、1920年に大連発鉄嶺着は63噸で、鉄嶺駅総着数は、5□7噸である、□の数字は不鮮明である。その割合は10.5%-12.4%ぐらいである。

次に、各駅着総トン数の推移における大連発の割合をみよう。表5により、二つの点を指摘できる。

①營口駅と奉天駅着の紙類は、ほとんど大連発であり、中東線行きも主に大連発である。し

1907-31年における大連港を中心とする紙類の流通(宋)

かし現象として類似していても、必ずしもその意味は一致していない。営口は、直接的な消費地ではないから、大連発営口着紙類の多くは営口の中国商人の流通ネットワークにより、背後地に再分配された。大連から営口へ鉄道で輸送した理由の一つは、鉄道運賃が、船賃より安かったからである。1915年の大連海関の報告によると、下等紙が1915年に盛んに大連港に移入された。汽船二隻で大連港に到着し、鉄道で営口へ連絡輸送された。それは、船賃が高かったため、牛荘にある商家が鉄道を利用したからであった³³⁾。

一方、奉天では、紙類は主に奉天および周囲で消費された。奉天市場は、大連商業ネットワークの直接かつ最も重要な一環であった。

②それ以外の各主要駅では、大連発の割合が増えた。特に1925年以降、ほとんどの駅では、大連発の割合が四、五割以上になった。これは大連商業ネットワークの拡大を反映したものである。

これらの特徴を総合的に考えると、紙類において営口の流通ネットワークの衰退及び大連流通ネットワークの拡張が明らかである。

3 各地の紙類消費の特徴

次に、紙の種類消費構成を検討する。大連港の背後地の文化・経済・産業・住民構成といった地域特徴をたどり、それが紙類の消費とどのように関係していたかを考察しよう。

(1) 紙類消費の地域的特徴

表3によると、特に大連・奉天・長春・ハルビンにおける新聞用紙の需要が高かった。

新聞を発行しない、あるいは発行部数が少ない地域では、新聞用紙の需要も低かった。「南満洲」三港のひとつの安東をみよう。1919年末、新聞の種類数において、大連では4種類、牛荘では2種類が発行されていたが、安東では1種類しかなかった³⁴⁾。1910年代前期の調査によると、安東の後背地は比較的交通便利なので、「文明の機運に接する機会少なき為め一般に民度低く旧慣を墨守するもの多きを以て」、紙類の需要も甚だ少なかった。特に外国紙の使用は、安東市内の日本人および一部の中国人に限られた³⁵⁾。

地域の産業上の特徴も紙類の消費状況に反映した。遼陽では、朝鮮紙の需要が全「満洲」のなかでも奉天に次いでいた。それは、遼陽が「満洲」における第一の焼酒製造地で、容器の柳條製角形籠の漏洩を防ぐために内面に朝鮮紙を貼ったからである。朝鮮紙の需要が高かったため、毎年朝鮮紙を販売する朝鮮人が来て局店(問業者)に寄宿し、年額約一万円内外の貿易額があったという。

金融の発達も、紙幣の用紙の需要を増加させた。例えば関東庁の1910年代前期の調査による

と、東北三省の商業・金融中心地である奉天では、紙幣の用紙としての「鳥の子紙」を商舗の信用手形として使っていた。また、従来北京で印刷された中国各銀行発行の紙幣は、奉天で自由に印刷することが出来るようになった。紙の品質は従来、中以下のものの需要が多かったが、漸次福井産物紙などの上品物に変化した。それまで奉天では、一口四十連以上の注文はまれであったが、吉林及黒竜江省方面から官帖印刷用として大口の注文が入るようになり、一か年の需要額が六百連合内外になったという³⁶⁾。

和紙の使用は、ほとんど日本人に限られた。和紙の消費地域範囲は、日本人が住んでいたところのみであった。

(2) 奉天・ハルビンにおける紙類の消費

大連港の背後地の中でとくに奉天とハルビンにおける紙類の消費構造にふれておこう。その理由は、奉天が大連商業ネットワークの重要な一環であり、ハルビンが中東鉄道の重要な都市でウラジオストク港と密接な関係を持っていたからである。

① 奉天

奉天の紙類消費の変化の趨勢は、大連港の紙類輸移入構造と同じである。焼紙の割合の減少が一番はなはだしい。1915年には焼紙は全体の58.9%を占めていたが、十年後の1925年には2.4%しか占めていない。更紙の割合は1915年の1.2%から、1925年には6.1%に増加した³⁷⁾。奉天における新聞紙発行部数の増加が、更紙消費増加の主要原因であった。

また、教育の発達にともない、書籍文具の販売も好調となった³⁸⁾。

② ハルビン

中東鉄道の敷設によって勃興した大都市ハルビンは「北満洲」の中心市場であり、「満洲」地域で新聞発行種類が一番多い都市だったので、新聞用紙に対する需要も多かった。ハルビンにおける紙類の内訳をみると、1929年のハルビンにおいて更紙が四割を占めていた³⁹⁾。

ハルビンでは紙類は生産しておらず、その需要はすべて外部から鉄道と馬車などにより輸入された。その輸入ルートは、大連港など「南満洲」三港経由とウラジオストク経由の二つがあったが、その大部分は大連経由であった。1910年から1925年上半期までの統計によると、1910-15年、1921-23年におけるウラジオストク港からの紙類の輸入はなかった。大連港の紙類の輸移入量はウラジオストク港よりはるかに多かった⁴⁰⁾。

おわりに

本稿では、「満洲」の紙類流通をめぐる推移を検討し、以下のことを明らかにした。

貿易総額から見れば、1912年に大連港が牛莊港を越えたが、紙類については、大連港の優勢は1924年からのことであった。外国紙と中国紙の流通構造からみれば、中国紙の輸移入を中心とする牛莊港と、外国紙の輸移入を中心とする大連港という分業体制が成立していた。

大連港の外国紙の主要仕入地は日本であった。「南満洲」三港における板紙・巻煙草用紙・印刷用紙(普通とメカニカル・ウツド・パルプを用いていないもの二種類)・藁板紙・日本紙・化粧紙などの輸入のほとんど全部は大連港経由であった。

大連港を中心とする紙類の種類流通の変化から、背後地の「満洲」地域社会の変容がうかがえる。「満洲」地域における中国紙消費の代表である葬儀用紙の焼紙は、1910年代前期まで中国紙輸移入の四割を占めていた。1920年代には、一割に減った。外国紙の代表としての印刷紙は、1915年の1.5%から、1930年には18.1%に激増した。この時期に近代文化事業が発展したことは、満洲地域における新聞の繁栄からもうかがえる。

鉄道統計によって、大連港から輸移入された紙の背後地への流通ルートが分かる。その流通ルートをたどると、背後地における各都市の紙類需要状況の不均衡性をうかがうことが出来る。やはり大連・長春・奉天・ハルビンが紙類の主要消費地であった。

また、この流通ルートは、営口と大連の商業ネットワークの消長を反映していた。1920年代半ばまでは営口商業ネットワークが優勢であったが、大連発営口着の割合からみると、綿織物のような絶対的な優勢を保っていた訳ではない。1920年代半ば以後、外国紙を主とする大連港の優勢が確立した。各駅着量のなかで大連発の割合が優勢になった。紙類の取引中心地も営口から大連に移った。これは、大連商業ネットワークの拡張と優位性を反映したものである。

大連港の背後地の紙類の消費のあり方は、各地域の文化・経済・産業・住民構成によりそれぞれ異なっていた。奉天とハルビンは、紙類消費の中心地であり、紙類の供給を主に大連港に仰いだ。大連商業ネットワークの中心地である奉天は、その五割以上を大連港から直接搬入した。一方、大連商業ネットワークの延長線に位置したハルビンは、中東鉄道線における一番重要な都市であったが、ウラジオストク港からの紙類輸入が少なかったため、紙類の供給については大連商業ネットワークに組み込まれていたことがわかった。

<注>

- 1) 中国古代の紙と印刷の技術史についての研究は、銭存訓『中国科学技術史 VOL5-1 紙と印刷』科学出版社上海古籍出版社、1990年。(Tsien Tsuen-Hsuein, *Science and Civilization in China Volume V Paper and Printing*, Joseph Needham Cambridge University Press 1985.)が挙げられる。
- 2) 姜慶暉「関外満洲紙張の来源与管制」『北大史学12』北京大学出版社、2007年1月、439-445頁。
- 3) 「紙類輸出入表」(外国品輸入(東海関)、支那内地品輸入(東海関)、支那内地品輸入(西海関))により。農商務省商工局編「満州産並ニ外埠ヨリノ輸入紙類ニ關スル報告書」(農商務省商工局臨時報告 明治35年 第3册) 農商務省商工局、1902年3月、19-22頁。
- 4) 1902年のデータは、「第五 汽船及支那船ニテ青泥洼港ニ輸入セル荷物表」(「露治時代ニ於ケル大立内市説略」、「小山秋作氏旧蔵奉天軍政署関係史料」所収、中央大学図書館所蔵)による。また、「大連港輸入貨物」(汽船及戎克にて)(『露国占領前後に於ける大連及旅順』) 22頁。

- 5) 1907-12年における紙類輸移入額は「Dairen Trade statistics III Imports(Net)」¹⁾ Principal Articles imported 『中国旧海関史料』(『中國舊海關史料』(1859-1948)) (『中國舊海關史料』編輯委員會編：京華出版社、2001年) (第58冊)、105-106頁(58-191、58-192頁)により、外国紙が海関両で表示し、中国紙が、担で表示している。総額が不明である。1913-31年における紙類輸移入額が『北支那貿易年報』(南滿洲鉄道株式会社総務部調査課(大正六年-昭和五年上編)南滿洲鉄道株式会社、1919-1931年)各年度より作成。1931年は『滿洲貿易統計』により、但し、1931年の統計は、滿洲内貿易を計上されていない。
- 6) 前掲『北支那貿易年報』各年度より。
- 7) 前掲『北支那貿易年報』各年度より算出。
- 8) 関東都督府民政部庶務課編「南滿洲ニ於ケル紙類」(関東都督府民政部庶務課、1916年)24頁。
- 9) 永田平八郎「滿洲に於ける紙」(昭和10年3月調査)(調査 第3輯)(滿洲輸入組合聯合会、1936年)90頁。
- 10) 前掲、「南滿洲ニ於ケル紙類」、134頁。
- 11) 『滿洲に於ける紙の需給と製紙工業』(滿鉄調査資料 第111編、南滿洲鉄道株式会社庶務部調査課編、1929年)及び前掲『滿洲貿易詳細統計』、『北支那貿易統計』各年度より算出。
- 12) 「營口ニ於ケル紙類状況」(明治四十一年八月三日附在牛莊帝國領事館報告)『通商叢纂』(明治四十二年、第51号、商業)、12頁。
- 13) 南滿洲鉄道株式会社編『滿蒙全書』(第1巻)(滿蒙文化協會 1922年)188頁。
- 14) 前掲、『滿蒙全書』(第1巻)189、190頁。
- 15) 前掲、『滿蒙全書』(第1巻)193頁。
- 16) 前掲、『滿蒙全書』(第1巻)203頁。
- 17) 農商務省『輸出重要品要覧』(第8冊 工産之部 第三次紙類及紙製品)(農商務省、1895-1909年)47頁。
- 18) 前掲、『滿蒙全書』(第1巻)117、123-124、126頁。
- 19) 前掲、『輸出重要品要覧』(第8冊 工産之部 第三次紙類及紙製品)52頁。
- 20) 前掲、「南滿洲ニ於ケル紙類」、110頁。
- 21) 李相哲『滿洲における日本人経営新聞の歴史』(凱風社、2000年)。
- 22) 筆者の作成した新聞に関する統計表は、基本として、廃刊後再刊行が、二種類と算し、改題の場合が、一種と算する。資料は、表3の出典のほか、以下も参照した：
1927年末現在の資料は、「支那」JACAR：B02130818700、「附録 日本人経営の新聞雑誌／支那」JACAR：B02130820300 調書・情報局・外国に於ける新聞 昭和3年版(上巻)／(亜細亜、阿弗利加、大洋州の部)(外務省外交史料館)より
1930年末現在の資料は、「滿洲」JACAR：B02130829300、「附香港」JACAR：B02130829700 調書・情報局・外国に於ける新聞 昭和6年版(上巻)／(中華民國各地並大連及香港の部)(外務省外交史料館)より
1931年末現在の資料は、「滿洲」JACAR：B02130834900、「附大連」JACAR：B02130835000 調書・情報局・外国に於ける新聞 昭和7年版(上巻)／(滿洲及支那の部、附大連、香港)(外務省外交史料館)より。
- 23) 関東長官官房文書課『関東庁要覧』(昭和3年)(関東庁、1929年)173頁。
- 24) この「滿洲日報」は、滿鉄の機関紙である。1927年11月1日に1905年10月15日に創刊された「遼東新報」と1907年10月創刊された「滿洲日日新聞」と合併した新聞である。その譜系は前掲『滿洲における日本人経営新聞の歴史』364-365頁を参照。
- 25) 筆者自ら作成した新聞に関する統計により。
- 26) 前掲、「南滿洲ニ於ケル紙類」、79-80頁。
- 27) 前掲、『輸出重要品要覧』(第8冊 工産之部 第三次紙類及紙製品)、48頁。
- 28) 前掲、『輸出重要品要覧』(第8冊 工産之部 第三次紙類及紙製品)、49頁。
- 29) 前掲、「南滿洲ニ於ケル紙類」、79-80頁。
- 30) 前掲、『滿洲に於ける紙の需給と製紙工業』248-249頁。
- 31) 前掲、「滿洲に於ける紙」、127頁。
- 32) 拙稿『大連港を中心とする綿織物流通ネットワーク 1907-1931』『現代社会文化研究』第43号、2008年12月「表11 大連発各主要駅着綿織物割合(%)」272頁。
- 33) 聶宝璋・朱蔭貴編『中国近代航運史資料 第2輯(1895-1927)』(下冊)(中国社会科学出版社 2002年)1415頁。
- 34) 前掲、「表3『滿洲』における新聞の統計(都市別)」。

1907-31年における大連港を中心とする紙類の流通(宋)

- 35) 前掲、「南満州ニ於ケル紙類」、98頁。
- 36) 前掲、「南満州ニ於ケル紙類」、109-110頁。
- 37) 「1915年に於ける奉天輸入紙類の種類別数量」(単位：俵)(奉天商業会議所調査)、「南満洲における紙類」107-108頁、表「奉天輸入紙類品種別」(単位：斤)『奉天に於ける商工業の現勢』(南満洲主要都市と其背後地 第2輯 第1巻)(谷村武編、南満洲鉄道株式会社興業部商工課編 南満洲鉄道株式会社1927年)242-243頁のデータによる。
- 38) 「民国十一年至二十年 最近十年各埠海関報告 瀋陽」『中国旧海関史料』(第157冊)(京華出版社、2001年)367頁(355頁)。
- 39) 前掲『満洲に於ける紙の需給と製紙工業』277頁。
- 40) 「浦塩港輸入主要外国貨物累年数量表(単位：英噸)」『数字上より観たる浦塩斯德商港』(哈調資料大正15年6月)(南満洲鐵道株式會社哈爾濱事務所調査課,1926年)28頁。

後記：麻田雅文氏により、「小山秋作氏旧蔵奉天軍政署關係史料」や「露国占領前後に於ける大連及旅順」などの貴重な資料を閲覧することが出来ました。この場を借りて、感謝の意を表します。

主指導教員(芳井研一教授)、副指導教員(藤井隆至教授・山内民博准教授)